

特別史跡 遠江国分寺跡

天平 13 年 (741)、聖武天皇は仏教の力で当時の社会不安を取り除こうと、全国に国分寺と国分尼寺を建てるように命令しました。

遠江国では、当時国府（現在の県庁にあたる役所）があった磐田の地に国分寺と国分尼寺が建てられました。

遠江国分寺は災害や時間の経過により、その建物を失いましたが、地下にはその痕跡が残されており、大正 12 年 (1923) には内務省（当時）から史蹟保存地として指定されました。昭和 26 年 (1951) に実施された発掘調査（第 1 次調査）では、遠江国分寺の金堂や講堂、回廊などが発見され、全国の国分寺の中でも初めて主要な建物の配置が明らかにされました。この成果から翌年 (1952) には、国から特別史跡に指定されます。昭和 40 年代には、全国の国分寺に先駆けて史跡整備も行いました。

その後、平成 17 年度より遠江国分寺跡では、再び整備事業が進められています。再整備に伴う発掘調査により、遠江国分寺は南北 259m、東西 172m の範囲が築地塀によって囲まれており、その中に木装基壇を有する金堂や塔、講堂などが建ち並ぶことが明らかになりました。

また、金堂の正面には木製の柱をもつ灯ろうがあったことも発掘調査で判明しています。



国分寺・国分尼寺位置図



再整備イメージ図（南より）

【詳細はこちらから】



整備工事の様子



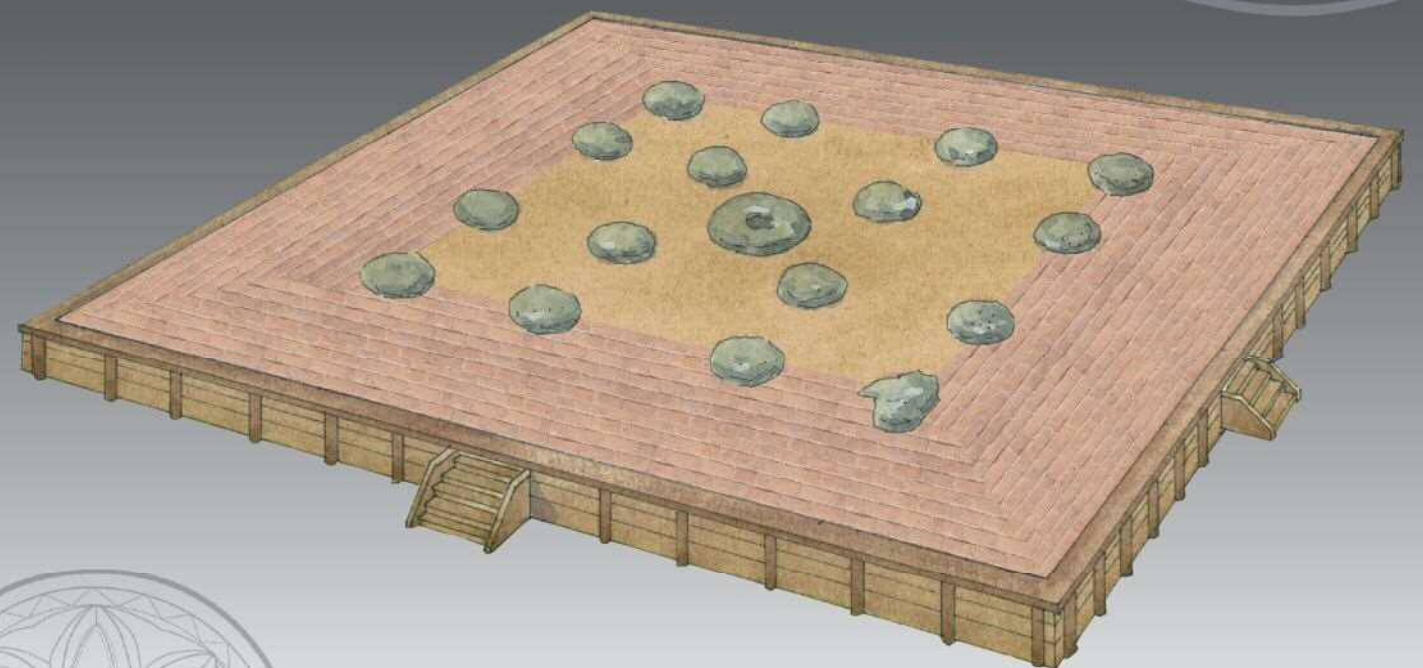
整備事業について

最新の調査・研究成果に基づき、磐田市では平成 28 年度に『整備基本計画』を策定しました。計画においては、地下に眠る遠江国分寺の痕跡を保存し、次世代に継承していくことを大前提としつつ、かつて遠江国分寺がこの地にあったことを体感できる史跡整備を目指しています。

その方針の下、令和 3 年度より現地にて整備工事に着手し、令和 4 年度には講堂と僧房、令和 5 年度には金堂の木装基壇が完成しました。来年度以降には灯ろうやあずまや、説明板などの整備も行っていく計画です。皆さまには、ご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げますとともに、完成を楽しみにお待ちしております。

令和 6 年 11 月 30 日 磐田市教育委員会 教育部 文化財課

特別史跡 遠江国分寺跡 塔跡整備工事見学会



塔基壇整備イメージ図



七重の塔イメージ

塔

経典を安置し国を護る神聖な建物です。七重の塔で、高さは67m程度と推定されています。木造で屋根は瓦葺き、屋上には相輪が立てられます。

推定復元される基壇の大きさは東西17.8m×南北17.9m、高さは1.0m程度です。建物の平面規模は9.6m四方(3間)です。

中心と外側の南東隅の礎石が、奈良時代当時の位置のままに残されています。金堂の礎石と同じく豊岡地区の敷地(現在の獅子ヶ鼻公園付近)から運ばれてきました。

整備工事では、木装基壇を復元するほか、コンクリートで製作した礎石を補って配置させます。また建物外側には、塼(古代のレンガ)を再現して敷き詰めます。

塔本塑像(とうほんそぞう)

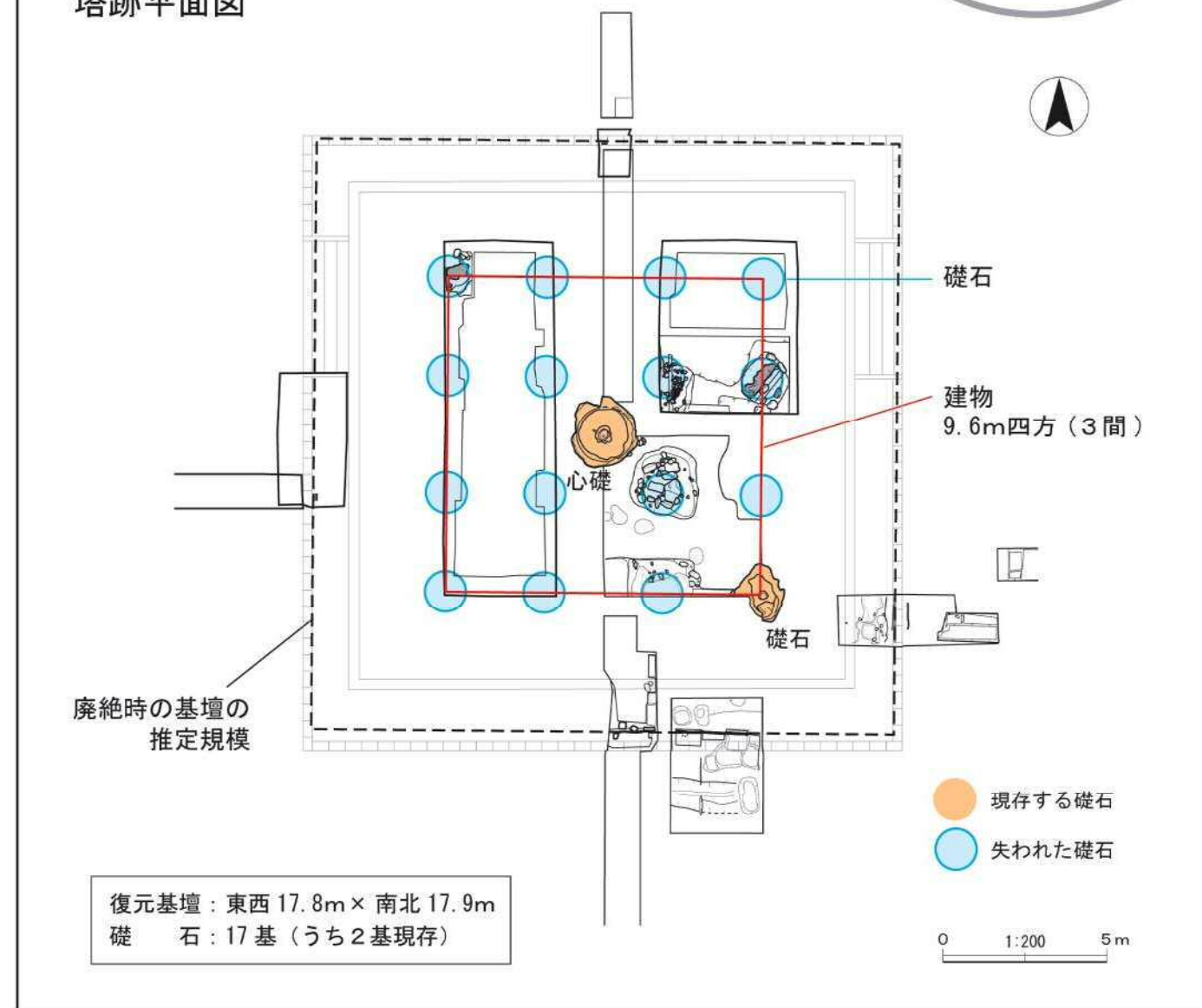
再整備に伴う発掘調査では、塔の初層を飾っていた塑像の頭部が出土しています。

塑像は粘土で成型して着色した仏像で、本来は長い年月の間に土に還ってしまいましたが、塔が火災で焼けたため、現代まで残り、発見されたものです。

塔本塑像(高さ7.9cm)



塔跡平面図



塼(せん)

古代のレンガやタイルです。金堂や塔などから数点出土しています。

遠江国分寺では、基壇上面に敷き詰められていたと推測しており、整備でも金堂や塔でその様子を復元していきます。



長さ45.0cm × 幅19.5cm × 厚さ9.0cm程度

遠江国分寺跡(塔跡)出土塼

木装基壇

「基壇」は建物の土台部分であり、雨水などから建物を守るために周囲の地面よりも高く造られています。遠江国分寺跡では発見された基壇を復元整備することにより、奈良時代に建っていた建物の跡を表示しています。

少しずつ土をつき固めながら積み重ねた版築による盛土を行った後、崩れないように石や瓦などを使って外側を覆いますが、遠江国分寺跡では木の板や柱を使った「木装基壇」であることが再整備に伴う発掘調査で明らかとなりました。

塔跡や金堂跡では、火災により焼けて炭となった木材が出土しています。多くはヒノキが使われていました。

こちらも工事しています!

塔跡と合わせて回廊南西部の一部の木装基壇復元工事も行っています。

回廊は、屋根付きの渡り廊下で、金堂と中門をつないでいました。基壇の幅は9m前後、建物の幅は6m(2間)あり、中央に壁が付く複廊と推定されます。

今年度の工事終了後には国分寺公園がどのように変わっているのでしょうか。しばらく工事が続きますので、来年の春を楽しみにお待ちください。

